



職業、 商人

1

JOB IS MERCHANT

小説 黒おーじ 218
イラスト

試し読み版



CONTENTS

第一章 女戦士

005

外伝 勇者のアジト

060

第二章 アンデルセン

077

第三章 ドキッ! 女学園潜入

118

第四章 淫獣と大蔵大臣

187

外伝 商人流、ダンジョン攻略

246

第五章 女勇者

259

JOB IS MERCHANT



第一章 女戦士

一年前、勇者が魔王を倒す旅に出たそうだ。そのため、最近では世界中が勇者の話題で持ちきりである。新聞は連日勇者の戦果を伝え、吟遊詩人は勇者の勇敢さを詠い、子供はこぞって勇者ごっこを始める。

その勇者が育ったことで噂の、アンデルセンの城下町。この国は近頃、人、モノ、金が急激に集まってきたらしい。そりゃあそうだ。勇者の魔王討伐だなんて巨大イベント、世間が見逃すはずがないのである。

まず、勇者の仲間になってパーティに加わりたい者が情報を求めてくる。また、そういう連中に武器や防具などの軍事物資を売ろうと商人が集まる。そうした流れを見越し、アンデルセンの政府は道路や橋などのインフラを再整備するし、ある程度の土地持ちはその土地を担保に宿やホテルをガンガン建てるから、資材が集まり、土地や債券金利はうなぎ登り。雇用も確保され、失業率は一パーセントを切った。よって勇者の魔王打倒への旅立ち以降、アンデルセンは空前の好景気を謳歌していたのである。

さて、商人を職業とする旅人の俺にとって、こんな芳醇な市場を野放しにするわけにはいかない。俺はいま、最近できたという話の新街道を利用してアンデルセンの城下町へ向かっているとこ

だ。まだピカピカの石畳を馬車の車両がカラカラと心地よい音を立てている。

爽やかな秋風が頬を撫で、青い空に油絵の具のような雲。情景はまったく文句のつけようもないくらい気持ちのよい秋の日であるが、じつを言うと俺の心中は重たかった。というのも、このアンデルセンに向かうタイミングが商人としてはあまりに遅すぎたということを自覚していたからである。

こういった好景気につけ込んでよそ者が商売をしようとするときは、スピードが命である。早ければ早いほどよい。なぜなら、国や大富豪がもたらす大きな注文は好況初期に契約が埋まってしまふものだし、土地の転売などで儲けようとするにも底値近くで買えなければ美味しくないからだ。では、もっと早く行けばよかったじゃないか、と思われるかもしれないが、事はそう簡単ではない。俺は旅の商人であるから、ダンジョンやイベントを攻略したりもする。その関係上、どうしても即座に向かうことができなかったのである。

害虫を奥歯で噛み潰していると、『アンデルセンまで残り十キロ』という看板が立っているのが見えた。

やれやれ、ようやくここまで来た。あと少しだ。

できればそのまま到着まで止まらずに行きたかったのだが、下腹部にただならぬ尿意を感じていたので、ここで一度用を足しておこうと思った。馬車を石畳の道から逸らし、路肩に停め、茂みに隠れてズボンを下ろし、放尿を開始する。

それがもう、出るわ出るわ。尿が止まる気配というものが感じられない。

そんなときだった。

「おい、おまえ。動くんじゃねえぞ」

背後から汚らしい格好をした男十人ほどがワラワラと湧き、各々が武器を手に取り俺を牽制している。

「悪いが、おまえの馬車は俺たちが貰っていくぜ。まあ、おとなしくしてれば命までは取らねえよ」
その中でリーダー格と思わしきスキンヘッドの男が、ドスを利かせた声でそう言った。

なるほど。人や金が集まるところにこういったならず者の盗賊も集まるのは道理だな。しかし、どうしたものか。まだ尿が止まる気配がないのだが……。

「あんたら、馬車を貰うと言ったが、一応あれには魔法でロックがしてある。俺じゃないと動かせねえんだぜ」

俺は一応そう言っただけの様子を窺^{うかが}ったのだが、それは抵抗ととられたようだ。

「だから、おとなしくロックを外せと言っただけだ！ ナメてんのかコラ！」

横から、顔に無数の傷をこしらえた大男が苛^{いら}ついたように大声を上げる。それに次いでスキンヘッドが続けた。

「なあ、このままだとおまえをめちやくちやに痛めつけなくちゃあならなくなる。俺は暴力はあまり好きなほうじゃないから、素直に従ってくれるとありがたいんだがな」

盗賊としてはコンピネーションの効いたよい脅しである。

「まあなんにせよ、ちょっと待ってはくれんか。せめてこいつが終わるまではよ」

俺が、勢いよく流れ続ける尿を指差してそう言うと、スキンヘッドは「まあいいだろう」と一歩下がった。そりゃあ、いくら盗賊が脅しても、生理現象まで止められるものではないからな。

「ちよつとあなたたち！」

唐突に、俺と盗賊たちが固まっている後方、つまり街道側から、大きな声が上がった。女の声だ。その、場違いな声に驚き、首だけを反転させてみると、確かに女がそこに立っている。

まさに黄金色の長い髪に、宝石のようにきらめく瞳、触れれば跳ね返ってきそうな白い肌。ひと言でいえば美しい女だったのだが、姿勢好は戦士のそれだった。青の装甲で統一された防具は、魔法がかけられているのか、関節と急所だけを覆うものであり、肌の露出が甚だしく、彼女の重量あるおっぱいや、S曲線にくびれた腰周り、そして引き締まったお尻などが強調されているがゆえに、極めて扇情的だ。

「あなたたちが最近この街道付近に現われるという盗賊ね！」

彼女は身の丈ほどもある巨大な剣を構え、勇ましく問う。

「だったらなんだってんだ？」

女戦士の急な乱入に一瞬戸惑っていた盗賊たちであつたが、スキンヘッドだけは即座に気を持ち直した様子だ。

「自首するのであれば許してあげるけど、抵抗するなら切るわ」

一瞬、間があつたが、次の瞬間、盗賊たちは一斉に爆笑した。

「ぎゃははは。冗談キツいぜ」

「姉ちゃん、ひよつとしてアレか？ お股が疼いて俺らに構ってほしいんか？」

「そりゃあいい。大歓迎、ウエルカムだぜコノヤロウ」

盗賊たちは口々に下品な言葉を投げかける。

「なあ、スキンヘッド」

「なんだこら……っっておまえ、まだ小便終わってねえのか!？」

「まあまあ、俺の用足しのことよりさ。あんたら早いとこ逃げるか、自首するかしたほうがいいぜ」

「は？ なんだだよ」

「あの女が身に着けている鎧、あれは並大抵の奴じゃ使いこなせない。おまえらじゃかなわないよ。痛い目見る前に逃げたほうがいいって」

「おまえには関係ねえ。っていうか、おまえは盗られる側なんだから、本当に俺たちが倒されるんだったら黙って見ておけばいいじゃねえか」

「俺は親切心で言っているんだよ。ああいう正義を振りかざした輩は容赦なかつたりするんだ。盗賊とはいえ、可哀想だからな」

「てめえ、あまり俺たちをナメるんじゃない……」

そのスキンヘッドの言葉に被せるように、盗賊たちの悲鳴が上がった。すると、この一瞬のあいだに半数の盗賊が女戦士の足の下に伏してしまっている。その大きく、重そうな剣を持ちながら、驚愕の早業だ。

「ほら見たことか」

俺は得意げにスキンヘッドを見る。

「うるせえ。おまえは小便してろ」

そう言うときスキンヘッドは俺への牽制を解き、女戦士の側を向いた。

「おい、おまえら！ 慌てるんじやねえ。相手はひとりだ。バラバラに攻めずに、円形に取り囲め」
スキンヘッド以外の盗賊の残りが女戦士を囲み、ジリジリと距離を詰めていく。

「よし、いまだ」

号令とともに盗賊たちは一斉に攻撃を開始した。ある者は剣や槍で、ある者は炎の魔法で襲いかかる。さすがにこの多重攻撃に対応するのは困難であるように思われたが、女戦士は想像以上に素早い動きでそれらをかわし、次々と盗賊たちをなぎ倒していく。その姿は木の葉のようにつかみどころがなく、舞のように華麗だ。

しかし、取り囲んできた盗賊がすべて倒れると同時に、スキンヘッドが呪文を唱えると情勢は反転した。

「か、身体が動かない……」

女戦士は、まるで拘束されているように動けなくなったのである。

「そりゃあそうだ。チェインの魔法をかけたからな」

よく目を凝らすと、女の手首と足首が鎖のようなもので縛られているのがボンヤリと見える。魔法で鎖を具現化したのであろう。

「よくも部下たちをやってくれたな。さて、どうやってかわいがってやろうか」

そう言う、スキンヘッドは、女戦士の胸部の装甲に手をかけた。

「ちよっと、なにをするのよ！」

動けないぶん、怒号を上げる女戦士であつたが、スキンヘッドはそれに応じず、装甲を剥ぎ取る。すると、『ぶるん』と音を立てんばかりの弾力をもつて、女戦士のおっぱいは丸出しになつた。

「ほお、これはすごいな」

感嘆が上がるほど、そのおっぱいは重量、形、ともに申し分ないものであつた。さらに、魔法の鎖によって両手がうしろに組まれているので、『はい、どうぞ』と言わんばかりに突き出ているのが、より美しい形を演出している。

「むむう、いい手触りだ」

そうやってスキンヘッドがおっぱいを揉みしだくと、女戦士は「くっ……」と言つて顔を横に逸らし、羞恥に顔を歪める。

「おまえ、戦士なんてやつてるのもったいねえつて。俺の女にしてやるよ」

スキンヘッドはそう言う、女戦士の唇を奪うべく、彼女の顎をつかみ顔を近づけていった。

*

しかしだ。スキンヘッドの粗忽な唇が、女戦士の口元へ到達することはなかった。その前に、彼は膝から崩れ落ちるようにして女戦士の足元に倒れてしまったのである。光る頭はピクリもしな

いから、どうやら失神しているらしい。

「ふん。私は、自分より弱い男に唇を許したりなんかしないのよ」

術士が気を失ったので女戦士にかかっていたチェインも解けたようだ。そして、彼女はなにやら自分のおでこを痛そうに撫でている。

なるほど、そうか。頭突きだ。

チェインは、よほど魔法に熟達した者が唱えなければ、両手足を拘束するのみで頭部までその効力が及ぶことはない。女戦士は、スキンヘッドの顔が近づいたときとっさの判断で唯一稼可動可能な頭部による打撃を試み、そして成功させたのである。普通の奴は、チェインをかけられると焦って混乱状態に陥るものだが、この女戦士は相当に戦闘慣れをしているのだろう。

さて、ここでようやく小便が終わった俺は、おもむろにウオッシュの魔法で手を清め、その手で自らの頬を叩いて気合いを入れた。なぜって、これから仕事をするからである。

俺は商人の顔を作り、女戦士のほうへ向かった。

「いやあ、強い！　びっくりしたよ」

まずは商人の必須科目、ヨイシヨからだ。

「そうかしら」

女戦士は先ほど外された胸当てを装着しながら、こちらをいちべつ一瞥した。

「ああ。男性には決して真似できない美しい戦闘というものを拝ませてもらったね。神々しさすら

あつた」

一瞬、言いすぎたかなと後悔した。ヨイショというのは適切な案配が大切に、過剰な言葉は往々にして逆効果を生むからである。

「ま、まあね。私にかなう男なんて、勇者様くらいじゃないかしら」

俺の心配は杞憂だったようだ。めちやくちや嬉しそうである。ニヤケたいのを我慢して、その豊かな頬をなんとか自我で抑えつけ、ちよつとだけモジモジしている様子が彼女の心情をありありと物語っている。

わかりやすい娘だなあ。

その後、俺は自分の名と身分を告げ、こう続けた。

「失礼ながらお聞きするけれども、貴女はアンデルセンの人間かい？」

「違うわ。私は武者修行中の身で、アンデルセンには三日前に来たばかりなの」

「なるほど、そうなると、やはり目的は勇者の情報かな？」

「もちろんそうよ！」

女戦士は『勇者』と聞くと同時に目を爛々^{らんらん}と輝かせた。

「私、勇者様のパーティに加わえてもらって、一緒に魔王を倒したいの」

「そ、そうかい」

あまりの勢いにたじろぐ俺。

「世界に平和をもたらすお手伝いがしたい。そのために厳しい修行にも耐えてきたわ」

「それはずいぶん志のお高いことだね」

「そしてゆくゆくは勇者様のお嫁さんに……」

前言撤回。ずいぶんと俗っぽい動機だ。口には出さないけど。

「しかし、残念ながらいまのままでは、勇者のパーティに加わっても足を引っぱるだけだと思うぜ」
俺はここであえて挑発的な言葉を選んだ。持ち上げてばかりでは商売にならないからだ。
すると、女戦士はふいに俺の首を絞め上げた。

「どうしてよ！」

「く、苦しい」

「あら、ごめんなさい。つい興奮しちゃって」

やれやれ、怒られるかとは思っていたが、首を絞められるとは思わなかったぜ。

「貴女は確かに強い。身のこなしは言うまでもなく、魔法で防護されたその青い装甲の扱いも上手く、めったなことでは他人に遅れをとることはないだろうさ」

「じゃあなんで？」

よし、食いついてきた。

「その剣だ。貴女の装備で、武器だけかなり見劣りする。質量で物理的な威力をカバーしている
ようだけれど、造りは粗暴で切れ味が悪いんじゃないか？　こんな剣では勇者の下へたどり着いて
も信用されないだろう」

「確かにそうだけれど、私、この剣しか持っていない……」

肩を落として消沈する女戦士。

ここが攻めどころだ。

「しかし、気に病む必要はないぜ。ちょうど仕入れたばかりなので貴女にぴったりのものがあるんだ」
俺はそう言うとき、走って馬車に行き、武器を一本取り出した。

「青龍刀ね」

女戦士はつぶやく。

「ああ、しかしただの青龍刀じゃない。ちょっと振るってみるがいいさ」

「いいの？」

女戦士は喜々として青龍刀の柄^{つか}を手にし、尋常ではない速さでそれを振るった。刀身のうなりとともに引き裂かれる空気の音が彼女の高い力量を示している。

「これ、軽い……」

「だろ？ これにはストレスフリーの魔法がかかっていて——」

俺が商品について懸命に説明していくと、彼女はますます気に入った様子で青龍刀を眺める。長い柄部分の確かな丈夫さを握り確かめ、先端の刃へは日光を照らしその鋭利さに感嘆する女戦士。

「まあ、多少値は張るけれど、それだけの価値は間違いなくあると思うぜ」

「値が張るというと、どのくらいなのかしら？」

「名刀にしちゃあそこまでもない。アンデルセンの通貨だと、ほんの七百万ポンドだ」

「そんな大金無理よ！ 軍艦が一隻買えるじゃない」
悲鳴を上げる女戦士。

「値は良心的だって。貴女ほどのレベルの戦士に見合う武具であれば、このくらいは当然するぞ。その証拠に貴女の青い鎧、それはもつと高いはずだ。下手すりゃ小規模な艦隊が組める」

「え、これそんなにするの？」

なんだそりゃ。買ったのではないということだろうか。

「まあ、お金がないっていうならローンを組んでやってもいいが」

「本当に？」

「ああ、だけどその鎧は担保な。抵当権は貰うぞ」

「たんぼ？ ていとうけん？」

ああ、面倒くせえ。

「つまり、貴女がちゃんとお金を返せなくなったときには、その鎧は貰いますよってことだ。保証のようなもんさ」

「なんだ、そういうことね。わかった、いいわよ」

この娘、大丈夫だろうか。世間は俺のように正直な商売人ばかりじゃないよ？

まあ人にはともあれ、よい品を強い戦士が買ってくれるのだから、商人冥利に尽きる。

俺は鎧の抵当権を得るために女戦士の肘の部分の装甲に触れ、リードの魔法を唱えた。リードは商品の情報を読み込む魔法で、商人の必須魔法だ。

しかし、情報を見た俺は顔をしかめることになる。

「なあ貴女さ、借金してんのか？」

「え、してないけど」

「でもこれ、すでに第一抵当権がついているんだけど」

そう、これではもしこの女戦士が破産しても、第一抵当権を持った人間が邪魔で鎧を回収することができないのだ。

「え、じゃあ前の持ち主がそうしたのかしら」

まあ、誰の借金だろうが、これではローンを組んでやれないことに変わりはない。

「残念だが、この話はなかったことに」

俺はそう言っつて青龍刀を取り上げようとするのだが、女戦士は離さない。

「嫌」

「子供みたいな駄々こねるもんじゃねえ。貴女いくつだよ」

「十八よ」

むう、子供と言えなくもないか。やたらとグラマラスな体型をしているから、もう少し上かと思っていたがなあ。とはいえ、武者修行の旅に出ているくらいなのだから、それなりの分別はつけておいてもらいたいものである。

ため息をつく俺。

「で、どうする気さ？」

「え？」

「貴女はいまお金もない、担保もない、でも青龍刀は離したくないと言っているわけだが、俺から商品を強奪したいのか？」

「そういうつもりじゃ」

「そういうつもりじゃないと言うのか？　しかし、このまま商品を持ち去ったならば、ここに転がっている盗賊たちとどこが違うというんだ。とてもじゃないが誇り高き戦士とは呼べない」

「そんな……」

女戦士はその大きな瞳に涙を溜めた。エメラルドグリーンの薄い色彩の瞳が潤むと、まるで南国の澄んだ海のようにとても見栄えがする。

もちろん俺だってこんな責めるようなことは言いたくはない。

しかし、この青龍刀にはアンチシーフの魔法がかけてあり、決済を済まさずに俺から一定距離遠ざかると、ブザーが鳴り最寄りの国の警察が動く。この女戦士なら警察を相手にしても平気かもしれないが、お尋ね者の身に成り下がるのは可哀想ではないか。

「わかったわ」

「そうか」

俺はホッとひと息つく。これでやっと解放されてアンデルセンへ行ける。

しかし、それは甘い考えだったようだ。

「決闘をしましょう」

？

「誰と、誰が？」

「もちろん、私とあなたがよ。決闘をして、私が勝ったらこの青龍刀をいただくというのであれば、戦士らしくていいでしょう？」

「全然よくない。俺が勝っても得るものがないだろ。それじゃまるで不平等条約だ」

「あなたが勝った場合も得るものはあるわ」

そう言うと、女戦士は鎧の胸当て部分の装甲をポンと叩く。

「その鎧は駄目だつて。抵当権を抑えられているんじゃないや売り物にならないのだよ」

「そうじゃなくて」

そこで俺はようやく彼女が極めて恥ずかしそうに頬を朱に染め、唇を固く結んでいることに気がつく。

「まさかとは思いが……」

「ええ、私の身体を懸けるわ」

女戦士はそう言うと、俺の左腕に絡みつくように抱きついてきた。

「私は戦士だから筋肉の締まりもいいし、結構おっぱいも大きいと思うの」

はい、大きいです。俺の肘関節にちょうどその大きいおっぱいが押しつけられているからよくわかるさ。

「もちろん、私は自分が負けるだなんて思わないけれど、一応決闘なのだから、条件は平等にしな

くちやね」

女戦士の金色の髪からシャンプーの香りが漂い、息使いまでが伝わってくる。なにより、十代特有の攻撃的なまでにキメの細かいスベスベとした素肌が俺の左腕に絡みついてきやがる。俺の意識は次第に下半身の熱に侵されていった。

しかし、そのときだ。俺は師匠である父親の言葉を思い出した。

『商人は商品に対する情熱を持ちながら、常に冷静であれ』

そうだ、冷静に考えれば、女戦士がいかに珠玉の美女であるとはいっても、七百万ボンドと釣り合うはずはない。ここは毅然^{きぜん}としてノーと言うべきだ。

「決闘、してくれる？」

「ああ！　しよう。決闘」

あれ？　おかしいな。

そういうわけで、俺は女戦士と決闘をすることとなった。俺の超高級武器と彼女自身の肉体を懸けて……。

*

俺は、頭を抱えて馬車の荷台の上に座っていた。

「じゃあ私は、この盗賊たちをアンデルセン警察に引き渡してくるから。そうね、あそこの丘のて

つべんに、大きな銀杏の木が立っているのが見えるでしょう？　そこで二時間後に待ち合わせね」
そう言って女戦士が去ったのがいまから一時間ほど前。

ロマンティックなデートの待ち合わせ文句のように聞こえるかもしれないが、実情は全然違う。
むしろ逆で、決闘の待ち合わせなのだから無骨なことこの上ない。

「まいったなあ」

ポツリとつぶやく俺。

ちなみに、すっぱかすという選択肢はほぼ不可能である。

人間同士が決闘を行なう際は、『決闘申請書』という書類を、決闘地の領土を統治している国家の役所に提出するのが国際常識だ。決闘申請書には、双方の捺印またはサインと、決闘に伴う条件を克明に記入しなければならないのだが、それは先ほどやってしまい、女戦士がついでに当局へ提出する段取りになっている。

なぜそんなものに捺印したかといえば、自分でもわからないというのが正直なところではある。
ひとつ言えるのは、『駄目だ、損だ、割に合わない、怖い』という頭による冷静な判断を、女戦士のムッチムチな身体を前に下腹部周辺からほとばしる熱い情欲的ななにかによって支配されてしまった、ということだけである。

しかしまあ、後悔先に立たずだ。いつまでも頭を抱えていたって気が滅入^{めい}ってしょうがないから、俺は馬車にロックの魔法をかけ、林中に入ってしまった。まだ一時間ほど時間に余裕があったから、

水場が見つかればいいなと思ったのだ。四〇五分行くと、水の流れる音がかすかに聞こえ、林が開けると流れの緩やかな小川が現われた。

俺は小川の縁にある岩へ腰かけ、折り畳み式の釣り竿を取り出して、糸だけを垂らす。針がついていないから魚は釣れないのだが、戦闘の前に気持ちを落ち着けたり策を練ったりするには、このスタイルがもっともよいのである。

あの女戦士は確かに強い。だが、俺とて伊達に幼少の頃から旅の商人として世界を股にかけてきたわけではないのだ。過酷なダンジョンにてモンスターとの戦闘を余儀なくされることもあれば、人間との決闘も初めてのことではない。

それに彼女には弱点もある。スキンヘッドとの戦いでも見られるように、魔法に弱いことである。向こうは絶対に勝てるという自信があるからこそ自らの貞操まで懸けているのだろうが、少なくとも十回やって十回負けるということはないはずだ。

ただ、心配事はほかにもあった。それは、『俺は女の子に暴力を振るえるのか?』ということである。

いや、俺はべつにフェミニストを気取るつもりはない。決闘なのだから加減無用という理屈もわかる。しかし、俺は師匠である父親に『男の子は女の子を殴っちゃいかん』とキツくキツく教育されていたので、生理的に手を出せないのではないか、という懸念がどうしてもつきまとってしまっただ。

さあ、そろそろ時間だ。俺は馬車から青龍刀を持ち出し、それを武器として使うことに決めた。女戦士からすれば自分があとでいただくことになるはずの武器に渾身の打撃を打ち下ろすのは躊躇^{ためら}われるはずである、という消極的な理由からのチョイスであつたが意外に有効なのではないかとも思う。

約束の丘へ向かうと、銀杏の木の下にはすでに女戦士が立っていた。傾きかけの陽が黄金色の葉に射し、美しい彼女の姿を飾っている。

「待たせたか？」

「ううん、全然。いま来たところよ」

ううむ、なんか上機嫌だな。

いぶかしく思いながら女戦士のうしろ側に視線を移すと、もうひとり女の姿があるのに気づく。木の陰に寄りかかっていたから気づかなかつたのだ。

その女はメシア教の神官服を着ていて、銀色のサラサラな髪がそれによく映えていた。整った顔をした美人ではあるのだが、少し釣った目からキツイ印象を受ける上に、そっけない表情で愛想がない。

「おい、彼女誰だよ」

俺は女戦士に耳打ちして尋ねる。

「公証見届け人よ」

メシア教圏の国々には、神職の人間が折々に『唯一神の名の下に見届ける』という複雑怪奇な行動をする風習がある。とはいえ、これもなかなか侮れない制度であり、たとえば俺が今日決闘に負け、青龍刀を渡すという約束を反故にしたらならば、僧侶が百人単位でやってきて、唯一神の名の下に俺はボコボコにされるのだ。しかも、アンデルセン国教会の僧侶というのがこれまた精鋭ぞろいなのである。

そうか、つまり女戦士は、約束を反故にされる可能性を考慮して、この神官さんを連れてきたわけだ。そして、これでもう青龍刀は自分のものになると確信して、こんなに機嫌がよいのである。まったくなめられたものだ。

「それでは決闘申請書の確認をさせていただきます」

神官さんが初めて口を開いた。さすがに厭かな感じの声だ。

「ああ、よろしく頼むよ」

俺がそう応えたと、決闘申請書の内容を読み上げる神官さん。

「以上だが相違ないか？」

「はい」

笑顔でそう答える女戦士に対して、神官さんの眼光は鋭く、目にかかる銀髪の前髪の間からこちらを睨にらんでいるようにも見える。

俺は再び女戦士に向かって耳打ちをした。

腰のギアをトップに入れると、彼女の身体は火照りに火照って、接合部はちゅくんちゅくんと音を立てる。

「きゃ、あ、あん、きゃん、きゃん」

もうなりふり構わず叫び続ける女戦士。こうなるとすでに動物の鳴き声と変わらない。

そしてしばらくすると、女戦士は身体を頭から爪先までおもいつき反らして、けいれん痙攣するように腔内を締めつけた。

「あ!! ……うー!!!」

一見苦しんでいるかのような悶え方だったが、いつているのである。

構わず続ける。

「や、やめて! なんか、おかしいの。おかしく……あつ!」

再び振り返り、痙攣する。

どうやら連チャンするタイプらしい。

彼女の生まれて初めての絶頂に釣られて、俺ももはや限界である。

「く、そろそろイキそうだ。出すぜ」

俺がそう言うのと、女戦士は怯えたように顔を振り向かせた。

「出すって、中に? やめて、それはやめて!」

叫びながら暴れる女戦士だが、魔法がかかっているからたいした力ではない。俺は彼女の肩を押



さえつける。

「で、出る！」

「嫌っ、いやあ……」

怒り狂ったように波打つ俺のち×ちゃんは、女戦士の中に勢いよく子種を放出した。

どびゅっ、どびゅ、どびゅん。

膣の中に熱い熱い液体が吸い込まれていく。約二十回ほど波打ったち×ちゃんはそのたびに大量の子種を吐き出したから、俺はその最後の一滴までを余すことなく女戦士の中に注ぎ込んだ。

「あ、赤ちゃん、赤ちゃんができちゃうよう」

彼女はそう言って哀れっぽく涙ぐむ。

ち×ちゃんを抜くと、女戦士はお尻を突き出したまま生まれたての仔羊のように脚をガクガクさせて、大事な部分からはとろりとろりと乳白色の液体があふれ出す。

俺は俺で筋肉疲労的に満身創痍まんしんそういだったから、煙草を吸おうと自分のズボンをまさぐる。しかし、ズボンは女戦士の愛液でお漏らしをしたようにびしょびしょだったから、当然シガレットケースも湿気しけって、ふにゃふにゃになった煙草を吸うはめになった。

煙をくゆらせ空を見上げる。

陽はもう山際まで沈んでいて、紫の空色と銀色の三日月が俺を急激に冷やしていった。

「ねえ、神官さん」



「なんだ」

馬車を操る俺の横にちよこんと座っている神官さんに向かって話かける。『ついでにアンデルセンまで乗せていくよ』と言ったら素直に乗っかってきたのである。

「あの、『たとえ相手がもういいと言っても決闘申請書の内容は執行しなければならない』ってのは本当だったの？」

そう尋ねると神官さんは押し黙り、釣り目のあいだの眉間に皺しわを寄せた。頬にはツツツと冷や汗が流れる。

「と、とと当然だろう。け、決して『エッチってどんなもののかしら。生で見たいわ』などという好奇心から嘘をついたわけではないぞ！」

ご説明ありがとうございます。

やはりな。へんだとは思ったんだよ。両者の合意による契約の解消が許されない法など聞いたことがない。

「そうだよ。ね。神官さんは神に仕えるありがたいお人だもんね。嘘についてあの女戦士の処女を無駄に喪失させるなんてこと、しないよね」

「も、もちろんだ」

「まあ、これもなにかの縁だしさ。近いうちに神官さんの教会に顔を出すよ。その際はいろいろと便宜を図ってくれると、お互い幸せだと思うのだけ。神官さんもそう思わない？」

俺はそう言ってニッコリとほほ笑む。

「わ、わかった……」

神官さんは声を絞り上げるようにしてそう答えた。

コトコトと、馬車は道を行く。そして、アンデルセンの城下町が目視できる距離までたどり着いたとき、今度は神官さんから口を開いた。

「なあ、貴様。あの女戦士は放っておいてよかったのか？」

「と、言うത്？」

「貴様はあの女戦士に一般的に言うところの『中出し』をしていただろう。もしかすると孕^{はら}んでしま^う女を放っておくというのは、あまりに非人道的なんじゃないか？」

なるほど。この女、自らの立場が悪くなったものだから、なんとか俺を責め立てて劣勢を立て直したいわけだな。しかし、こういう口での勝負を俺に挑もうというのが間違っている。

「女戦士は妊娠しないよ。避妊したからな」

「嘘をつけ。『生』だったじゃないか」

この人は本当に……『なま』という二文字だけでも声色を変える。律儀な神官さんだ。

「俺のほうがピルピルを飲んでいたんだよ」

「なんだそれは」

「ピルピルつてのは要するに男性の子種を一時的に死滅させる魔薬さ。つまり、あのときの俺の子種は生殖機能のないただの白い液体だったってこと」

「じゃあなぜそれを言っ^てやらなかったんだ？ 言っ^ていればあの女戦士も安心するし、最後に暴

れることもなかったではないか」

「そんなの決まってるだろ」

俺は煙草に火をつけ、煙を吐き出しながら言った。

「嫌がついているところに中出しするほうが興奮するからさ」

「な、なるほど。そういうものか……」

納得しちゃったよ。齒ごたえないなあ。

「じゃあ私はここでよい」

神官さんは、そう言つて馬車から降りる。

「まだ城壁外だけいいの？」

「ちよつと壁外に用があつてな。ご苦労だった」

アンデルセンは城下町だから、町を城壁で囲つて全体の守りを固めているのだが、城壁内では土地が足りなくなつてきたのだらう、外にもすでに町らしきものが造られている。これはアンデルセンが好況である確かな証拠だ。

しかし、神官さんが城壁外になんの用があるというのだらう。神官というものは町の中心部にある教会にデーンと構えているのがお仕事のはずだ。

神官さんの首根っこを捕まえておけば教会相手に発注を取れるかな、くらいに考えていたが、もつと脂っこい話が転がっているかもしれない。まあどちらにせよ、彼女に対して優位なパイプを築けたのは、この町での商売における僥倖（カウチン）といえるだらう。

「神官さーん！」

すでに結構遠くに行ってしまったている神官さんに、俺は大きな声で呼びかける。
すると声に気づいたようでこちらを振り返る神官さん。

「またねー！」

俺はそう言って手を振った。釘を刺したのである。

さて、いまをときめくアンデルセンの城下町の正門前。

この町で大きな利益を上げるためには海千山千の猛者どもを相手取らねばならぬだろう。
俺は身を引き締めて、門に向かった――。

「まずは湯を浴びてこい」

そう言う神官さんの言葉に従って、俺はシャワーを浴びていた。

まあ確かに、あの大臣令嬢に近づくには構内に入るのがいちばんだろう。それならばカタに嵌めるのも、不可能ではなくなる。

いやいや、でも絶対無理だろこれ。やつぱり頭沸騰してるんだってあの人。うん、これはきちんと拒否しよう。拒否すべきだ。

俺がそう心に決めると、うしろからシャワー室のドアが開く音が聞こえた。振り返ると、女戦士が一条纏わぬ姿で恥ずかしそうに立っているではないか。

「なにしてんの？」

俺は、うつむく彼女にそう問うた。

「わ、私が。あ、ああ洗ってあげてもいいわよ」

女戦士は、目をギュッと閉じて、囁みまくりながらそう言う。そんなに恥ずかしいならやめておけばいいのに。

「いや、べつに。子供じゃないんだから自分で洗えるよ」

俺は優しさを発揮してそう言ったつもりだったのだけれど、女戦士はキッと睨めつけ、ズカズカとこちらに向かってくる。

ヤバい、こんなところで暴力を振るわれては致命傷は避けられない——。

そう思ったのだが、次に得た感触は戦士の硬き打撃ではなく、十代の娘の柔らかさであった。

「石鹼、貸さないよ……」

うつむきながらも、俺の身体にそっと触れる女戦士。

石鹼を渡すと、彼女はそれを泡立てたあと、ぎこちない手つきで俺の肩口から洗いだした。素手だから、妙にくすぐったい。

「やっぱり、うしろ、向いて」

全裸で顔を突き合わせているのが恥ずかしいのか、そんなことを言う女戦士。俺は素直に従うことにした。

「むお！」

「ど、どうしたの？」

この女、気づいていないのか。

なにが起こっているのかというと、彼女は俺の全面部分をうしろから無理やり手を伸ばして洗おうとするから、その弾けるおっぱいが俺の背中をむにゅむにゅと押しつけられているのだ。

「ぬむはっ！」

「ちよっと、大丈夫？」

大丈夫じゃない。なにせいまの彼女のおっぱいは通常モードではなく、石鹼がついているのである。そりゃあもうおっぱいがぬるぬると背中を滑って、俺のち×ちんは天井方向へ跳ね上がった。

ヤバイ、これはヤバイ。

首だけうしろを振り返ると、女戦士は心配そうにこちらを見つめていた。あいかわらずお人形さ

んみたいな顔をしていやがる。

嗚呼、ち×ちん刺したい。

でも駄目だ。ここでエッチをすることは、一昨日のエッチと劇的に意味が違う。一昨日はまだ一応建て前というものがあつたが、今日ここでエッチをしてしまうのは俺と女戦士が純粹に心惹かれて交わるということにほかならない。そうなれば、この思い込みの激しい女戦士は俺の下を離れなくなってしまうだろう。俺だつて離れたくなくなってしまうに決まっている。

それは彼女の、勇者のパーティに入りたいという夢を大いに阻害することだ。
だから、俺は我慢する。我慢するぞ。

風呂から上がった俺は完全にのぼせてしまっていた。

「ごめんさい。私の洗いがなにかおかしかったみたいね……」

そうしおらしく言う女戦士。

洗い方うんぬんというより、彼女はあれから身体を隅から隅まで洗ってくれたものだから、俺はずっと力を込めて情欲を抑え込まねばならなかったのである。

「おい、貴様」

へたり込んでいる俺に、神官さんがキツい目を向ける。

「なあに？ 神官さん」

「よく耐えたな」

あ、やつばあんた覗いていたんですね。

「結構その……見直したぞ。いまは安らかに眠るがよい」

そう言う神官さんの声は、いつもより少しだけ優しく響いたのであった。

「んんん」

俺が目覚めると、目の前には女が座っていた。黒い髪をポニーテールにして、セーラー服を着ている。なかなかの美少女だ。だが、少し眠そうにしているのはいただけないな。

彼女のうしろには神官さんがいて、その黒髪を櫛で梳くしいている。

「こんにちは、あんた神官さんの友達か……って俺かよ！」

その女は鏡に映った俺の姿であった。口の動きが一致していて気がついたのである。

「お、起きたな。もう少しで終わるところだから待っている」

「これ、神官さんがやったの？」

「ああ、化粧と少々の魔法でな」

「そんな、声まで変わって……」

そう。俺のダンディズムにあふれる声は、まるで生娘きむすめのような繊細な声になっていたのである。

「よし、完成だ」

俺は立ち上がって、自らの全身を眺める。どこからどう見てもアンデルセン女学園の学生だ。

「うーん、これなら確かにバレないかもしれない」

というか、原形を留めてねえよこれ。

「ねえ、ちょっと待って」

そう待ったをかけたのは女戦士である。

「どうした？」

「私もね、確かにかわいいと思う。だけどこれは問題なんじゃないかしら」

女戦士はそう言うとおもむろに俺のプリーツスカートをめくった。すると、男物のトランクスタイプの下着が露わになる。

「確かに、これはまずいな」

神妙な声を上げる神官さん。

「私、買ってこようか？」

というか俺、女物の下着とかめちゃくちゃ抵抗あるんだけど。

「いや、それには及ばん」

神官さんは、女戦士に制止をかけると、神官服の下に手を入れる。そして、自らの下着に手をかけると、それはするとその細い脚を下つていき、左足、右足とくぐつていった。

「はい」

「はい、じゃねえ！」

俺は自らの下着を差し出す神官さんの頭を、本気で心配した。

「なんだ、遠慮するな。私は貴様の、商売のためならば女装も辞さない、そんな根性に敬意を示し



ているのだぞ」

遠慮するなど言われてもなあ。

しかし、そこまで言われては受け取らないわけにはいかない。俺は、その薄いグリーンの、繊細な装飾が施された神官さんの下着を受け取り、ゆつくりと装着させていただいた。

「さすがにキツいな。締めつけが厳しい」

それに、まだ神官さんの温もりが……。

「なんにせよこれで完成だな」

「ちょっと待って」

満足気に完成を宣言する神官さんに待ったをかけたのは、またしても女戦士だった。

「今度はなんだ」

「これは駄目でしょう」

女戦士は俺の股間を指差す。そこには、プリーツスカートの上からでもひと目でわかるほどにいきり立つたち×ちんがあった。

「貴様、それくらい根性でなんとかせんか」

「無茶言うな。下着から美少女の温もりが伝わってくるんだぞ」

「前にも言ったはずだ。簡単にあきらめるな。私が見込んだ貴様であれば、きっとできる」

「神官さん……よし、わかった。うおおお」

俺は強靱な精神力をもつて、ち×ちんをなんとか静めていった。

すると、女性陣からやんややんやと拍手が起る。見世物にされてないかな、俺。

「なんにせよ、これで完成だろう」

「うん、これなら私も文句はないわ」

今度は女戦士のオッケーサインが出たようだ。

「よし、すでにアンデルセン女学園の学長には、明日から貴様が転入する旨伝えてあるから、思存分闘ってくるがよい」

「おいおい、転入って、本当に女学生になるってことか？」

「あたりまえだ。あそこの学園は関係者以外の立ち入りを厳しく取り締まっているからな。戸籍の提出などは心配するな。私の権限で免除させておいた」

つまり、俺は明日から女学生をやることになったのである。

大丈夫、そうだぞー、と言っているのだろう。

ちゅるちゅると唾液が滑り、ちゃつちゃつと卑猥な音が上がると、『俺』はびくびくと身体をよじらせる。乳首のときのような瞬発力のある喘ぎ声は上がらないものの、重厚な快楽をかみしめるような吐息と「うつ」という呻き声に、女勇者は満足気に笑みを浮かべた。

「なんか……へんつ、あつ、ふああああ……え？ ……つつつ☆!? ふえええ!?」

どびゅつ♥ ぴゅーぴゅー ぴゅーぴゅー ぴゅーぴゅー

おそらく、女勇者はそのテクニクをすべて披露する前だったろう。『俺』は身体を反らせ、細い腰をアヘアへと痙攣させた。天地のひるがえるほどの激烈な精通であった。

「んー、んっ」

さすがの彼女も、少しだけ顔を歪ませ、目を閉じる。それでも、口をすぼめ、きつちりと吸い取るようにち×ちんから口を離すと、縁側の縁から庭の外に顔をやり、唇からチュペつと精液を滴らせた。

それを見た『俺』は、正気に戻ったように、あわてる。

「ご、ごめんなさい！ なんか、おしっこみたいのが出ちゃった……」

「これはおしっこじゃないから安心しな。そうだなあ、うん。これがおまえのち×ちんを腫らしていた原因だったんだよ」

「そ、そうなんですかあ……勇者様はいろんなことを知っているんですね。すごいなあ」
ほっとした様子で、かつ、尊敬の眼差しが女勇者を向いていた。

「じゃあ、これで『たいへんなこと』にはならないんですね」

「いやいや、まだ仕上げが残っているんだ」

そう言うのと、女勇者は、立ち上がり、自らのベルトを外すと、カーキのカーゴパンツを下ろし、スラッとした脚と、ふくよかなお尻とモモを露出させた。

『俺』はというと、もうその姿に釘づけである。

先に、少年の憧れの最たるものとして、おっぱいを挙げたが、それと双璧をなすものとして、『女の子のパンツ』を挙げることができるだろう。まだ性知識の浅い少年のモヤモヤとした『エロ』意識の中で、パンツ、パンティ、下着——といった存在は、そのはるかなる象徴ともいえる存在だからだ。

その上、女勇者のパンツは純白であった。やさぐれた感のある女勇者のファッションからは容易に想像し難い清純な下着である。

精通を体験したばかりで元気をなくしていた『俺』のうら若きち×ちゃんは、再びムクムクと起き上がっていた。

女勇者はおもむろに『俺』の上へ跨ると、下着の上からその大事な部分をち×ちゃんへこすりつけ始める。

先走り汁なのか、それとも先ほどの残り汁なのかはわからないが、ち×ちゃんの先からはかすかに液が出ていて、彼女の白いパンツを汚した。なんと畏れ多い！だが、すぐパンツの中身のほうから愛液が染み出してきたから、それらは混じり、ヌルヌルにち×ちゃんと下着越しのビラビラのこ

すれ合いの潤滑油として機能し始めたのであった。

「これ、飲んで」

と、女勇者は、灰色の錠剤を渡す。

「なあに、これ？」

「これはピルピルという避妊薬だよ。エッチというのは、とても気持ちがいものだけれど、子供を作るとき以外はきちんと避妊をしなくちゃいけないんだぞ。わかったか？」

「んー、わかりました」

そう返事をして首を傾げながらピルピルを呑む『俺』だが、本当に意味がわかっているかは疑わしい。

『俺』の喉がゴクリと錠剤を呑み込むと、女勇者は卑猥なシミで染め上がったパンツをペロンっと大胆なしぐさで脱ぎ捨て、上からのしかかるように膣口をち×ちんへあてがった。

「なにをするの？」

『俺』は疑問符を頭に浮かべながら問う。キョトンつとしていて、あどけなく、天真爛漫な表情である。

「いちばん気持ちのよいことさ。気持ちいいの、好きだろー？」

『俺』は、頬を染めながらもコクリと首肯する。

女勇者は「よーし」という具合に口の端をペロリと舐めた。気合いの入った様子だ。そして、ググッと腰を沈めて、ヤンキー座りのような格好になる。むにつと潰れる太もものあいだで丸出しに

なっているピンクの割れ目が、少年ち×ちんの亀頭をパクつと捉えた。

ぷちゅっ♥　ちゅぷちゅぷちゅぷ……。

女の股の割れ目は、みるみるうちにシヨタち×ちんを呑み込んでいった。そして、ヌヌヌと進んで、深淵なる女性の奥まで突き刺さる。瞳には、女らしい切なげな色が爛々と灯った。

「あっ……」

「わあ、あたたかいやつ」

『俺』は、自分がいまなにをやっているかなど理解していないだろうに、感嘆の声を上げる。

そんな無邪気な喜びを受け、女勇者はフフッと顔を綻ばせたのち、腰をゆつくりと前後左右にぐねらせ始めた。

ヌチっ……ヌッチ、ヌッチ……ぷっ、ぷぷっ……じゅぷっ、じゅぷっ、じゅぷっ♪

「あわわ……おち×ちん、とけちゃうよう」

「んっ、んふう……うふふっ、まだまだだぞー。あんっ」

最初はヌツぽ、ヌツぽとゆつくり大きく出し入れをして馴染ませるような感じだったが、次第になにか焦りだしたかのように腰のスピードは上がっていった。

「あっあっあっ、あんっ！　うー、うー、あっ、いやんっ♥」

接合部から跳ねる銀色の愛液。鍛え上げられた女勇者の肢体は踊り、シリアスな腹筋の割れ目には快楽に合わせて力が込められた。

「あんっ、いい♪　すごくいい♪　おまえ、才能あるよ！」

「お、おで、おで……なんだかまたへんな感じが、ああ……うひっ」

つつっ!? ……どびゅっ! びゅるるるるる!!

『俺』の身体が再びビクンっビクンつと波打つ。女勇者の中で、精液を放出しているのだろう。

「あ、熱いのが……すごい勢いだな……」

そんなふうには冷静に分析する女勇者だが、頬は興奮に紅潮していた。

「だけど、やっぱり持続力はないなあ。仕方ないけど」

「なんだかよくわからないけれど、ごめんなさい」

「うん、大丈夫。持続力のなさは、回復力と回数でカバーだあ」

「え？」

女勇者はあろうことか、そのまま再び腰を動かす。

「ひゃひゃひゃ、なんかち×ちゃんがくすぐったいつ」

普通はこうなる。

しかし、恐るべきはエロ少年だ。『俺』はすぐさまくすぐったがるのをやめ、息を荒らげて少女のような声を上げ始めるのだった。

「あん、あんっ、あーん」

「よーし、いいぞー。このままおまえの精液で一杯にしておくれ」

こうして際限なく行為が過熱していきそうなおのときである。

「おい、ピッチが。人の家と息子でなにしておる」



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>